

# 子規連句私解

## 獨吟百韻「灯ともさぬ」の卷

其二十五(四オ十句)十一句目

大島 富朗

月凄く狼の聲しわがれし

夜寒の櫛句ふ新墓

「夜寒」の季は晩秋。二十四氣の寒露(陽曆十月八、九日頃)から立冬の前日(同十一月七、八日頃)までの日月をいう。爽かな秋晴れの、麗らかな一日も釣瓶落しの日が沈み、夜分に入れば寒さ身に覚えるのが季題「夜寒」の本意である。<sup>注1</sup>

里村は実りの秋ながら山村は早くも霜降の節、七十二候の(豺乃祭<sup>注2</sup>獸)に重なる。然れば、運びからいえば季移り(打越・前句)の差合いあれど大打越・打越が晩秋里村の近・遠景、展じて前句が初冠雪をみた山裾の村の景、冬と行き合う山村晩秋の生活が付く。付合でいえば「新墓」に初(新)冬(死)を各々暗示させ、前句の「月」に付句が「夜」、「狼」に「墓」という具合の四手付<sup>注3</sup>でもある。併に遊ぶと同時に三句の渡りは相互に確と組み合い、宛ら指物師の手練の業見るの感あり。

「狼」に「墓原」が付合<sup>注4</sup>語。「墓原」は墓所・墓地の意であるが、この場合「句ふ墓原」では折角な前句の趣向、凄味が生かされず無為、「新墓」と執り成し凝らす時「櫛句ふ」の効果機能が機能し凄愴の感を継ぐ。勿論、埋

葬形態は火葬でなく屍体を直接土中に葬る所謂土葬形態であってこそ前句の「狼」に應ずる。今日普通に見受ける墓石墓碑等を構えた、見た目が立派な「新墓」ならぬのは自明、土を小高く盛っただけの簡単な土饅頭<sup>注5</sup>に近い粗末なそれである。しかも、生ける者の常、死の穢れを忌み避ける心理が働き、墓所は生活圏の周縁へと追い遣られ、結果として「狼」などの野生が生息する空間と近接する。遺棄葬<sup>注6</sup>乃至土葬に付された屍体は恐らく肉食鳥獣にとり恰好の餌となったと容易に想像される。

「新墓」、四音訓ならへアラハカ、アラバカ、ニイハカ、ニイバカ、シンハカ、シンバカが考えられるが一応(アラハカ)と訓んでおく。

前句の「聲しわがれし」に應ずるに、付句は(ヨザム)へアラバカ)と濁音で訓むのが相応しいかと考えるが、一句の声調からは「ヨサムノシキミ ニオウアラハカ」の方が落ちつく。

人里近い墓所の「櫛句ふ新墓」、幽かに流れ来る手向けの「櫛句ふ」中に、早くも屍具を嗅ぎ取った「狼」の嗅れた遠吠える「聲」が響く無意味さと「月凄」き「夜寒」の景色。逢魔が刻が過ぎ百鬼が夜行し魍魎<sup>注7</sup>が跋扈する禍々しき世界が出現する。「狼見<sup>注8</sup>人屍<sup>注9</sup>必跳<sup>注10</sup>越<sup>注11</sup>其上<sup>注12</sup>尿<sup>注13</sup>」之<sup>注14</sup>而後食<sup>注15</sup>之」と説かれるごとく、他の野生に先んじて「人屍」を漁ら

んと示威の雄叫びをあげる、その声厳冬間近き雪降る山野、山里に木精す。

ところで、付句の「新墓」で直ちに想起されるのが上田秋成『雨月物語』中の一篇「吉備津の釜」<sup>注9</sup>である。

新妻磯良の誠実を躪った末、鞆の津の〈妓女〉袖と共に京へと出奔した夫正太郎、その後幾日も経ず荒井の里にて病の床に伏した袖、僅か七日にして身罷る。その突然な死に悲嘆の涙に暮れる正太郎、斯くてはならじと「曠野の烟となし」「骨をひろひ壙を築き塔婆を営み」、僧を頼み「菩提のことねんごろに吊ら」う。が、尽きぬ悲しみに「夕くごこと」に「壙のもとに詣ずる」が「小草はやくも繁りて虫のこゑすゞるに悲しき」風情に「此秋のわびしきは我身ひとつぞと思ひ」し折、袖の「新墓」と並びある「新壙」に詣ずる女と出会う。<sup>注10</sup>恰も奇しき運命の糸に操られるように女の物語る話に興覚えし正太郎、その女に導かれるまま女主人の「ちいさき草屋」を訪れ、其処で〈鬼〉と成り果てし妻磯良と再会、心身共に凍り付くほどの驚愕と恐怖を前に彼は只「あなやと叫んでたをれ死す」。正気に戻りてみれば、彼の磯良も女も草屋も跡形無く消え失せた元の墓地の三味堂、正太郎が其処に見たものは「黒き仏」であった。

その夜から「つらき報ひの程しらせまいせん」との磯良の言葉に違わず、〈鬼〉と化した彼女によりその忌明けの日まで夜毎夜毎筆舌に尽し難き恐怖を味あわされ、七七日目の五更に至り血塗られた死の報復を受ける。斯る惨劇の発端は取りも直さず正太郎の「奸たる性」に対し、死霊となり果てし妻磯良が巧妙に仕掛けた畏とも譬うべき「新壙(墓)」に他ならず、「戸腋の壁に腥くしき血漉ぎ流て地につた」ひ「屍も骨も」なく燈し火の先の軒先に男の髻ばかりが残り見える結末とともに強く印象に残る

「新墓」といってよい。

又、「愛欲の迷路」に踏み迷いし果てに「墓をあばきて腥くしき屍を喫ふ」<sup>注11</sup>屍食鬼と化した某阿闍梨を主人公とする、同じく『雨月物語』所収「青頭巾」の、

や、  
(略) 其肉の腐り爛るを呑みて肉を吸骨を賞て。はた喫ひつくしぬ

(略) 夜く里に下りて人を驚殺し。或ハ墓をあばきて腥くしき屍を喫ふありさま。実に鬼といふも(略)

という記述も、「狼」はいないが屍食を描いて想像を喚起する。

当然盛り土だけの簡素な「新墓」、肉食野生による屍食の害から守り防ぐためであり、屍臭を防ぐためでもあろうが、「柩」は多く山地に自生するが、墓地に植えられ、又、墓前に供えもする。その「柩」の「匂」いや抹香、線香の匂いが「新墓」周辺に漂う。付句のそれは植物の「柩」であるより、むしろ抹香・線香と解すべきかと。仮りに、

夜寒の抹香匂ふ新墓

夜寒の線香匂ふ新墓

の孰れでも尋常にすぎ前句の風情(凄味)が生かされない。

夜寒のしきみ匂ふ新墓

には全く禍々しさが感じられぬ。「柩」と漢字表記することで音符の「密」が視覚的効果を招き、人手の入らぬ荒るるに任せた周縁墓地の有様を描出

し、前句と響き合う。

尚、本付句の「新墓」、「吉備津の釜」の「新墳」に通じ合うものを窺わせるが、それ以上に近似性認めざるをえぬのが、小説『月の都』<sup>注12</sup>を介して縁浅からぬ露伴の『新浦島』<sup>注14</sup>其七 冒頭の次なる一文である（ルビ省略、傍点引用者）。

（略）夕々の御寺の鐘を何樂しみも無く聞かう心無く、苔まだつか

ぬ新墳の櫛枯れぬも却つて眼につく淋しさの風情、堪りかねて幾

度か跡を慕ひ樂しからぬ此世を捨てんとしたれど（略）

右引用の傍点部即付句といってよく、「枯れぬ」を反転すれば「匂ふ」である。

『新浦島』の「新墳」の被葬者は、主人公百代目の浦島次郎の初恋の人、七條三位の姫君に瓜二つなる町家の娘なるが、次郎と恋仲となるものの借老同穴の契り結ぶことなく「秋風さみしき頃病を得て、我へ一筆の思ひ籠めたる文を名残に脆く散る柳と失せ」し女性。この女性、身罷りし後その「俤のみを我（百代目次郎、引用者注）が夢に折く見する」点で「吉備津の釜」の袖の場合と異なるが、当該引用の描写は大概秋成に依拠したと考えてよく、勿論子規の付句も又、露伴の「秋風さみしき頃」「新墳の櫛枯れぬ」趣向そのままである。

序でに一言付せば、子規門石井露月の句に付句と同様な、

狼に墓の櫛の亂されし

の一句あり。<sup>注15</sup>

この外にも、前句付句が描出する景を髣髴させる発句に、<sup>注16</sup>

こゝらあたり狼出るといふ枯野哉

蛙堂

寒月に狼吼ゆる在所かな

全

狼や雪見峠の夜の月

速泉

狼や棺埋めし枯野原

松菊

狼の人喰ふべき口寒し

香墨

狼の山くだりゆく吹雪かな

孤村

狼や木枯の夜を近く吠ゆ

羽仙

狼の聲たけし夜の寒さかな

いろは

槽焚て狼の聲きく夜かな

淇柳

雪に暮れて狼吼ゆるしきりなり

茶村

雪に暮れて途狼につけられし

九陽

墓原を狼あさる落葉かな

羽仙

等々を認むが、孰れも「狼」に「枯野」「寒」「雪」「吼ゆ」「棺」「埋む」「喰ふ」「聲」「墓原」が取合され、響き合い、棲息が現実であった「狼」に対して持つ印象の奈何が窺えよう。今日では嘗ての伝承伝説に依る非現実的な想像力の所産でしかありえぬが、付句の場合は或る現実感を感じさせる景色といつてよい。

無常の付けである。

注1 虚子『新歳時記増訂版』（三省堂刊、昭45・11・10、増訂三五版）は同季題に

次のような説明を付す（該書612頁）。

秋、夜分寒さを感じるのをいふ。夜業の手先が冷えたり、坐つた所を立ちたくないやうな気がしたり、又戸外へ出て夜寒を感じるといふや

うなことも多い

例句に、立花北枝の「夜寒さや舟の底する砂の音」以下二十三句を挙げ  
る。

2 『滑稽雑談』卷之十七、九月之部上（國書刊行會刊、大6・3・25、225頁）  
参照

3 二條良基は『連理秘抄』（貞和五年<sup>1349</sup>七月十七日救濟奥書）（寄白）条の中  
で「餘情などはなくて、確にきりくみたる様なるべし」と説き（伊地知  
鐵男編『連歌論集』上（岩波文庫本、昭28・10・25）所収該書、35頁）、『連歌  
秘傳抄』（宗祇）<sup>補注1</sup>は、

四手付と云は、前の句あまたあるに、その詞毎に數多を取合せて付る  
を云也、

左も右もさほしかのこゑ

狩人の弓とり矢とり入山に

侍公

と説く（同文庫本、同集下（昭31・4・26）所収該書、89頁）。前句の「左・  
右・さほしか」、付句の「狩人・弓・矢・山」が「確にきりくみたる様」  
に付いている。

補注1 『日本古典文学大辞典』（岩波書店刊、'85・2・20）は「略」著者未詳

の学書。宗祇著と伝えられるが、単独の著述に成るか否かは不明。

成立年未詳（略）との木藤才蔵説を記す（当該書項目執筆 山口明穂、  
第六卷、282頁）。伊地知鐵男も岩波文庫の該書解説中に宗祇連歌関係  
の著述のひとつに数えるものの、「略」その例句の有無相違からし  
ても本書全部が宗祇獨りの創作になるとは斷言できないが（略）と  
記す（当該文庫本、11頁）。

4 『俳諧類船集』（近世文藝叢刊）等参照

5 現行の「墓地、埋葬等に関する法律」（昭和23・5・31、第四十八号）に依  
れば、「この法律で「埋葬」とは、死体。六法全書（妊娠四箇月以上の

死胎を含む。以下同じ。）を土中に葬ることをいう」（第一章第二条（定

義））のであり必ずしも土葬を禁じているわけではない。恐らく土葬に  
ついては各市町村条例の水<sup>レ</sup>準に委ねられていると思われるが未勘。一方、  
火葬<sup>補注1</sup>に関しては明治六年七月十九日付大政官第二百五十三号で禁止の旨

布告、翌々年五月二十三日付で第二百五十三号の布告廃止の布告がなさ  
れるという具合に振幅が認められる。尚、土葬も明治六年八月以降朱  
引内<sup>補注2</sup>では認められなかった模様。

詳しくは、平出鏗二郎『東京風俗志』（ちくま学芸文庫本、'00・11・8）  
下巻、第九章第三節葬祭参照（同前書101〜112頁）

補注1 『統日本紀』卷第一、文武天皇四年700三月の条は同月十日に身罷っ

た道照和尚が「栗原に火葬」されたこと、「天下の火葬此より始ま  
れり」と記す。同記事の補注1―131も合せ参照（岩波新古典文学  
大系12該書（）、23〜27頁及び286頁）

2 所謂御府内のこと、目安として東は中川、西は神田上水、南は目黒

川、北は荒川・石神井川下流を境とする（國史大辭典）5（御府内）

項目執筆村井益男、同辭典7当該項目同前、参照。

6 周知なる一例として『方丈記』中の養和の飢渴を引く（岩波新古典文学大

系39『方丈記 徒然草』所収該書、10〜14頁）。

又、養和ノコロトカ、（略）二年ガアヒダ世中飢渴シテ、アサマシキ事  
侍リキ（略）築地ノツラ、道ノホトリニ、餓ヘ死ヌル物ノタグヒ、數  
モ不知。取り捨ツルワザモ知ラネバ、クサキ香世界ニ充チ滿テ（略）  
仁和寺ニ隆暎法印トイフ人、カクシツ、數モ不知死ル事ヲ悲シミテ、  
ソノ首ノ見ユルゴトニ、額ニ阿字ヲ書キテ、縁ヲ結バシムル事ヲナン  
セラレケル。人数ヲ知ラムトテ、四五両月ヲ計ヘタリケレバ、京ノウ

チ、一条ヨリハ南、九条ヨリ北、京極ヨリハ西、朱雀ヨリハ東ノ、路  
ノホトリナル頭、スベテ四万二千三百余ナンアリケル。イハムヤ、ソ

ノ前後ニ死ヌル物多ク、又、河原・白河・西ノ京、モロ／＼ノ辺地ナ  
ドヲ加ヘテ言ハバ、際限モアルベカラズ。イカニイハムヤ七道諸国ヲ  
ヤ(略)

片や源平両氏の熾烈な覇権争いの時代、片や西欧列強に比肩せんと富国  
強兵に背伸び邁進を国是とする時代補注1幾屋霜経れど生活に飢渴し路傍に無  
残な屍を晒し心ならずも鳥獸の餌食となりし人数ひとかず少なからざりしであら  
う。不治の病や行路病者として地縁の周辺に打ち棄てられし者の末路で  
もあつた。

補注1 日清戦争直前、明治二十五・六年の東京下層社会(細民)の現状を

記録した作品に松原岩五郎著『最暗黒の東京』(明26・11・9、民友  
社刊)がある。同書に稍遅れるが横山源之助著『日本之下層社會』

(明32・4・30、教文館刊)もまた子規の当代社会のありようを知るに  
益すること大である。両書とも岩波文庫が収める。

7 yosamu no shikimi niou arahaka' とローマ字表記する時、奥母音  
(オ・ア・ウ)、前母音(イ)、奥母音(オ・ウ・ア)という発音が流麗で滑  
らかな印象を与えている。

8 『和漢三才圖會』卷第三十八獸類(東京美術刊該書出、449頁)

9 以下、同篇の本文引用は特に断らぬ限り勉誠社文庫5『雨月物語』(国  
立国会図書館蔵の影印本)、92〜110頁に依る(ルビ適宜省略)。

10 拙稿「女」の正体——「吉備津の釜」贅言——(『学苑』72、平・13・1)  
参照

11 注9に同、160頁(ルビ同前)

12 『全集』第十三卷所収、同巻は草稿も収める。尚、初出は「小日本」紙  
上、明治二十七年二月十一日から三月一日までながら実際には二十五年  
一月十三日に脱稿補注1、所謂草稿本である。

補注1 以下子規書簡、子規宛書簡から「月の都」に言及する個所を時系列

で抜粋摘記しておく(傍点引用者)。

○明24・12・31付虚子宛

(略)小生已ムヲ得ザル儀ニ立チ至リ現ニ一小説ヲ書キツ、アル  
也 其拙ナルコト自分ナガラうるさく實ハ冬期休暇已來來客謝  
絶致候得共それだけに仕事ハ出来ず一枚かいてハやめ半枚書て  
ハ筆を擲つこと幾度といふことをしらず そんなにいやなつま  
らぬものを書かねばならぬといふもつらきもの御察被下度候

○明25・1・12付兼五郎(碧梧桐)宛

貴兄已ニ御聞及びかも知り不申候得共小生冬期休暇中仕事(小  
説見タ様ナモノ)ニ取カ、リ居申候 其故一時ハ來客謝絶杯ト  
出掛け大ニ氣をもミ候がもう一回ですむといふ處まできりあげ  
申候(尤コレハ金ニ窮シテノ事なり)成功ハ無覺束、出版ノ程  
モ全く不定故高濱兄位ノ外餘ノ人ニハ餘リ御話無之様祈候

○同1・13付碧梧桐宛

小生著述ニ就而大といふ形容詞過分ニ存候 筆を取り、そめてよ  
り殆んど二十日今宵稍一遍通り畢へ申候(改刪スベキ處ハ猶無  
數ナリ)其間大息シテ筆ヲ捨テシ幾何ぞ 今迄の大言いづくよ  
り出たるぞ

小説脱稿後も「改刪」に勤む様子や出版への不安と懷疑、虚子碧梧  
桐の期待の大きさ強さ等々が書簡に窺える。

○同1・21付碧梧桐宛

(略)拙著零落成シタレトモ未タ荒壁にて上塗最中に御坐候 前  
便も申上候通出版之事ハ甚無覺束存候

(以下追而書か引用者注)前便も申上候通り小生當月ハ無一文  
ニテ相暮可申考居候處昨夜小説ノ書キ直シスル際ニ只一本ノ  
唐筆全ク禿シ盡シテ如何トモスルナシ(略)

○同1・23 付子規宛碧梧桐書簡

小説乃ち大人の腕をあらはすべき御小説今ハすでに御成功と存候、なにハ共あれ御出版可然と存候、此く申せば孔子に悟道の様なれど誰れしも初より善果を奏するとも行くまじくまして大人の小説の當時の人氣に適合せずとも其適合せざる處思白く尊きに候はずや、大人金に窮しての御仕末とハなさげなや(略)若し御出ばんなされずとも御草稿ハ虚子及び私兩人だけには御示し被下度是のみ手を合して拜み奉り候とハ御出ばんあれ、不肖腕やせたりとも口訥なりとも財囊を倒にして之を贖ひ又た人をして之を買はしむるに勉めん、必ずつとむべし(略)

○同右日付子規宛虚子書簡

(略)小説已に九分九厘にて御書き上の由、大慶至極に奉存候嗚呼早く美麗(どっこひ風雅)の表装をなしてまつしぐらに軍陣を驚亂せしめんことの待遠さよ夫に付ても少々御困窮のよし尙安然として洒瀟の御舉動いさましの御事ヤ(略)

○同1・25 付虚子宛書簡

○拙著大方荒壁までハ仕あげて上塗り最中と申上候へども上塗ハ中々手間のとれるものにてまだ片側だけ外すま。蓋し貴兄も知り給ふらん荒壁の乾かぬ内ハ上塗ハかけられぬ者なり(圖点子規)

○同1・30 付碧梧桐宛書簡

○僕の著作未だ成らず、これに付て色々の御忠告御慰諭難有拜誦致候、出板の上は人にも勧めて買ハしめんとの御好意誠に難有ハ候へども僕の出版せぬかも知れぬといふ意味ハ世の中に適合するとかせぬとかいふ事には無之候。竹村尊兄ハ頻りに拙著

の成就を促し給へども僕ハ常に其意に従はず、竹尊兄曰く左様に骨を折りても世の中にそれを見てくれる人はなかるべしと、僕答へて曰く拙著ハ世人をあてにする者に非ず世上の評論ハどのやうにあらふとも終に愚著に關係なし、兄僕ハ我意の満足する所に止まるのみ。(固より全く満足することハ出来ぬことなれども)。と。友人皆曰く左様にひねくりてハ樂屋落ちなりと

僕曰く樂屋落ちにて結構なり云々、蓋し僕の出版せぬかも知れぬといふハ第一、出版してやらふといふ人なければそれまで也。第二、原稿の買ひ手ありとも餘り安價ならバ賣らぬ積り也。何故に賣らぬや。名譽に關する故也。何故に名譽を重んずるや。僕答ふる所をしらず

○同2・8 付子規宛虚子書簡

(略)しかハあれど大兄玉稿の價值有無ハもとより玉稿其物に在り、彼れ心に言するもの一金に購ふも千金を吝まるも將た何の關する所ぞ、請ふ可成出版して現世紀の美文擅上能く眼を具ふるものあるや否やを試み賜へ、之亦一興にあらざや(略)

○同2・19 付碧梧桐宛書簡

(略)拙著小説は「月の都」と題して紙數(寫本)六十枚十二回の短篇なり而して末二回は大方謡曲にてつゞまり居候これら第一世人には氣に入らざるべしと存居候なり

○同右日付碧梧桐宛書簡第二

(略)拙著之事は前封にあり。それはよけれど拙著に付さう度々御すゝめ被下候ては小生實に僻易して只貴兄と高濱兄とをのみ恐れ居候、天下萬人の毀譽は一向に頓着無し兄御兩人のみをひたすらに恐れ候、小生の意少し御憫察被下候上拙著を決して善きものとの御想像無之様奉願候、右は高濱兄へも御忘れなく御

傳へ被下度候(略)

十二月三十一日の書簡以後「小説」とだけ述べている作品の題が「月の都」と明されるのが明けて二月十九日付書簡なる点、虚子碧梧桐の、題も知らざる小説に寄せる期待の大きさに「僻易」し「恐れ居候」と率直に述べ、「小生の意少し御憫察被下候」と困惑懇請する点に可笑味を禁じ得ぬ。

尚、当該書簡は『全集』第十八巻、別巻一が各々録す。

13 露伴、慶応三年<sup>1867</sup>七月二十三日生(二十一日とも)

子規、同年九月十七日生

約二ヶ月ほど露伴が早いのが正に同世代人。小説『月の都』評を露伴に求めるが結果として子規小説家を断念。同小説によって生じた露伴子規の交流を同じく書簡から摘記。

○明24・12・31虚子宛

(略) 幸ナルカナ獨リ露伴ナル一詩人(小説家トイヒタクバソレニテモ宜シ)アリ破天荒ノ筆法ヲ以テ優美ト宏壯トヲ兼ネタル大著述ヲナセリ(風流佛ヲ最トス其他亦能ク兩方ヲ有ス他人ニハ決シテ無之)

彼レノ著述に右ニ分子を含有スルノ多キハ明治第一ナリ否日本第一ナリ否世界第一 同人ノ著他ニハ<sup>補注1</sup>歛點アルベシ優美ト宏壯ノ二分子ヲ含ムコトニ於テハ世界第一ノ稱敢テ詔諛ニ非ズ 近者伽羅枕ナル者ヲ見ル少シ宛兩者ヲ含有スレトモ兩方共大不足也(殊に修辭學上露伴ニ及バザル遠シ)

補注1 明25・1・20子規宛虚子書簡中に、

(略) 優美崇高につきて懇とくなる御教示難有奉存候露伴子を以て優美宕壯の泰斗となされ候段御卓見の程さぞあらん(略)

との言及あり。

○明25・3・1碧梧桐宛

(略) 親寓(一町行けバ谷中の墓地也)を出て幸田露伴を谷中に訪ふ閑談三時間餘胸襟洒落光風霽月の天を現ハし腦痛全ク癒ゆ(略)

小生露伴を訪ふ事已三二度なり數日前拙著月の都を袖にして同氏を訪ふ 生曰く僕拙著一卷あり友人皆出版を勸む僕之に應ぜんと欲す 而して拙著中の趣向君の著述中より偷ミ來る者多し故に一應君の承諾を經且批評を乞ふ 露伴云くの挨拶あり談話二十分餘傍に客あるを以て談佳興に入らずして歸る、翌日約あり同家を訪ふ在らず其翌日露伴使を以て拙著を返し來る且ツ一書を添へて多少の評あり然れども盡さず生乃ち今日之を訪ふ所以なり。相逢ふて談じ去り談じ來り快窮まつて躍らんと欲す。事半ハ小説上なり。(略) 彼一句吾一句相笑ひ相怒り負けず劣らず口角の沫を鬪ハせしものとや思ひ給ふらん。其實談じ去り談じ來るものハ終始彼也 黙々又唯々たる者ハ終始我也。(略) 生ハ多少小説家の骨を得たり(肉ハ未だし) きたと思ふなり。(略) 近者露伴子と俳諧を鬪ハすの約あり、俳況ハ後便に報ずべし。尤同子も俳諧ハ左程の黒人に非ずと認めた後に、

露伴閑栖 鶯の奥に家あり梅の花

の一句を添え、形の如く日付等を記述し、「拙著ハマづ。世に出る事。なかるべし」との悲痛(?)な一文をもって終る。<sup>補注2</sup>

二十二年九月刊『風流佛』を出世作となす露伴(同じ頃子規はベースボールに興じていた)に『月の都』の批評を乞ふため訪問といえば聞こえよきが、「拙著中の趣向」露伴著作から「偷ミ來る者多し故に一應」挨拶の筋だけは通し諒解を求め、序でに評をという具合の、譬えていえば、「盗人猛猛しい」言い草、今日では盗作問題に発展しかねぬ所為である。一方、趣向を盗まれた露伴「云々の挨拶」「談話二十分餘」「一書を添へて」「拙著」返送、大人といえば然もあらん、二人の思う所何辺に

在るや、不可解にして興味深く、子規の一言、駄駄っ児の拗ね言めきてこれ又可笑しい。

補注1 明25・2月下旬子規宛露伴書簡

月の都悉皆拜讀いたし了り候

行燈消て水の音といふ御句など乍失禮面白く存し申候 波子と男と花のかけにて應對の場ハ今一應御勤考あらまほしく存候 其他ハ風松に入ることとき御文章の趣致めてたく閱覽仕り候 書き置きもなる事ならば最も文飾なきが宜敷ハ候はずやと被存候 御無遠慮に愚見申上候

子規様 把月

2 「正直に言えば、子規の負け惜しみであった。煮えくりかえるような腹の中の懊惱を、強て自制した冷やかな言葉であった」と碧梧桐は述べる（『子規を語る』〈岩波文庫本、'02・6・14〉119頁）。

次で、明25・3・10付碧梧桐宛

○露伴僕の小説を評して曰く「覇氣強し」と又曰く「覇氣は強きを嫌はず僕の風流佛の如きも當時は後篇を書かんと楽しみ居りしに今はいやになりたり云々と 其れ然り故に僕の見る所を以てすれば彼の著書中風流佛の如く面白き者あらざるなり（略）」

『月の都』を切っ掛けとし、以後俳句を通しての交流の様子が碧梧桐虚子飄亭等に書き送られる。

曰く、

小生先日露伴生と俳句附合杯を試みたり同人も俳諧は猶しろとなり此頃は餘程親しく相成無隔意相咄致居候（略）露伴と闘はしたるものとして凡句のみ（略）〈3・12飄亭宛〉

曰く、

先日露伴ノ内ヲ訪フテ小生約束ノ俳句ヲ出セシカトモ同人ハ未成ナ

りされど少し許り附合の興行なしたり（略）本月十日モ夜露伴ヲ訪フテ春雨に閑談を盡し辭シテ戸ヲ出ツレハ春雪霏々タリ（略）歸路露伴ヲ訪ふ居らず〈3・中旬虚子宛〉

曰く、

先日露伴との附合にて幸堂得知の評を乞ひしものは（以下略）〈3・25碧梧桐宛〉

曰く、

露伴の内へハ折々参り候が此頃でハまづ親友に相なり俳諧杯闘し候先日國會新聞に小生のと同人のと發句連載致候故右御らん被成しならバ同人の手並もほゞ相分り申せしことと存候（〈3・25頃虚子宛〉）小説は扱置き「俳諧は左程の黒人に非ず」「俳諧は猶しろとなり」「凡句のみ」「小生約束の俳句ヲ出セシカトモ同人ハ未成ナリ」「同人の手並もほゞ相分り申せしことと存候」等々の言質の裡に秘められし子規の一方ならぬ矜持を知る。

尚、「明治第一ナリ否日本第一ナリ否世界第一」との絶賛を惜しまなかつた『風流佛』の著者露伴評も後年には、

補注3

露伴の「二日物語」といふが出たから久しぶりで読んで見て、露伴がこんなまづい文章（趣向にあらず）を作つたかと驚いた。それを世間では明治の名文だの修辭の妙を極めて居るだのと評して居る。各人批評の標準がそんなに違ふものであらうか。

と酷評するまでに至る。（『墨汁一滴』〈明34・3・21〉）。稿者に同文中の

露伴評の当否を論ずる立場にないが、露伴子規に流れし十年の時の重さを改めて知らされる。

補注4

補注3 樋口チツ子は柳田泉の「露伴の神来の妙想を駆使したもの」との言

を引き「明治文学屈指の名文といわれる」と記述（『新潮日本文学

小辞典』〈昭43・1・10〉、幸田露伴項目、491頁参照）。



4 『全集』第十二巻収「天王寺畔の蝸牛廬」、同十三巻収参考資料4

「子規に關し露伴翁に聽く」と題された碧梧桐の会见録等参照

14 明治二十八年一月三日(三十日)、新聞「国会」紙上に連載。当該作評の

速やかなるものに原抱一庵主人「露伴(上)」「新浦島」を讀む。」(下)

(國民之友)第貳百六拾號(明28・8・23)、同第貳百六拾貳號(同9・13)、

島村瀧太郎(抱月子)「新浦島」を評す(「早稻田文學」第九十五號(明

28・9)がある。岡保生は前記兩者の評を対照紹介しつつ「放胆自在

をきわめた当代無比の大作家露伴が、その真情を吐露するとき、形式も、

結構も、問題ではなかったからである」と結ぶ(「新浦島」―幻妖―)

〔國文學解釋と鑑賞 異端文學の世界〕73・2、所収)。

異端名作家内という小論ゆえ作品論として隔靴搔痒の感あるは致し方無

し。

『新浦島』本文の引用は『露伴全集』第二巻(岩波書店刊、昭53・5・18第

二刷)所収該書(228頁)に依る。

補注1 抱一庵評からは、「奔放不羈の極、思軒居士が所謂、諷刺といはゞ、

或は風刺たるを得べし。寓言といはゞ或は寓言たるを得べし。然れ

ども其の荒唐無稽の餘、(略)讀む者概ね其の本旨を解するに違あら

ず、徒らに放談高論に驚て已む」の部分を、島村の評からは、「其

の結構の超人間的なるは、必竟想の幽にして大なるがためにして、

斯かる感想を曲ぐる所なく發揮せんには、全然抒情歌の躰を藉るの

外は、勢ひ本篇の如くならざるを得ざるに由るか」を引いて論ず。

(当該評の本文引用は、抱一庵は『國民之友』第17巻(一)(明治文

献刊、昭42・4・15)、156頁上段右、抱月は『早稻田文學』<sup>96次期</sup>

85第<sup>1</sup>第一(第

一書房刊、昭53・8・15復刊)、52頁 による。

因みに、『日本國語大辞典』第二版は「新墓」の用例に第一版の圓朝

『怪談牡丹燈籠』に加え『新浦島』の当該箇所を追加(第一巻、629頁)。

『露伴全集』(岩波旧版、昭25・8・20)は「新墳」に(あらはか)とルビ

を送るが『大辞典』は(アラバカ)と濁音の訓みを示す。

同様に『牡丹燈籠』、第一・二版とも「新墓」を(アラバカ)と訓むが、

岩波文庫旧版(昭30・6・25第一刷、52頁)は清音(あらはか)とルビ付

け(旧版を底本とし振り仮名は『円朝全集』巻の二(春陽堂刊、昭元)を参考

とする改版、02・5・16第一刷、83頁も同じ)。見出語を「あらはか」「新墓」

としつつ用例文共に(アラバカ)となす点不審(第一刷483頁、同二版629頁

参照)。

15 『露月句抄』77頁、同句抄季題(狼)は掲句の他に「狼の瘦せて劍に似

たるかな」「巖穴に狼人を護りけり」「狼に我糧寒き山路哉」の三句を載

せる。当該句抄は奥付無し、春草生による序(端書か)の一部を記しそ

の性格の一端を示す。

「露月句抄」は雑誌「三峨」十二號より四十一號にかけて掲載せられ

た石井露月先生自選の「續古抄」全部を四季類題別に致したものです

(略)

尚、子規門露月に関し、詳しくは『俳文学大辞典』(角川書店)同人項目

(39頁、石田冲秋執筆)参照。春屋序にある俳誌「三峨」についての詳

細、『同大辞典』に記述なし。『露月句抄』と共に後考を俟ちたい。

補注1 按ずるに俳誌「三峨」の特別号、もしくは別冊的性格の句抄と思わ

れる。又、露月自身の言に従えば後日を期す自選句集の稿本的性格

である由。没後、石井元次編による『露月句集』(昭6・5・1、青雲

社刊(未見)刊行(同大辞典)当該項目(和田克司執筆99頁)。

16 「ほととぎす」第拾三號(明31・1・30)収録、課題俳句「狼」、碧梧桐

選六十七句より摘出。

夜寒の櫛句ふ新墓

乙未の秋年七十とこそ記したれ

秋三句目。

「乙未」、訓読なればキノトヒツジなれどこの場合音数上へオツビと音読。須磨独吟の当年、二十八年の干支である。

「新墓」に刻された、あるいは墓石、卒塔婆に記された被葬者の享年と句解するのが自然であろう。余りにも付き過ぎであり味も素ツ気もない。

前句に付いて同じく無常の句。

句の訓みは「オツビノアキ トシシチジュウトコソ シルシタレ」、六・九・五音の破調は本百韻では異質といえる。

改めて本付合を考える時、当然のことながら前句の季題「夜寒」<sup>注1</sup>に思い馳せざるをえぬ。定座の「月・花」を除き一卷に同一季題が詠まれることまず皆無。しかも、発句と同一季題となれば尚更避けねばならず、仮令傍題であってもであり、斯るほどに連歌・俳諧において発句の位、<sup>注2</sup>意味は重たい。そうした約束事に子規が無頓着であったとは想像し難い。所詮無聊を啣つ慰み草といえば身も蓋もないが、敢えて「夜寒」を詠む前句が内包する意味を付句の側から読み解く。

本百韻解釈の際、稿者は当年即ち明治二十八年現在の子規を絶えず念頭に置き私解を試みてきた。具体的には、日清戦争従軍体験であり、死の一步手前に至った大患、その後の須磨松山での養生である。

約二ヶ月前、生死の境を彷徨った須磨は、その昔餓鬼阿弥と変じ地獄から帰った小栗が熊野本宮峯の湯で元の美丈夫小栗として蘇ったと同様、子

規自身、己が蘇生復活の地として強く記憶に刻印されていたに相違ない。然ればこそ帰京の途次、態態途中下車してまで再訪の労厭わなかったと、彼の胸中を忖度するが如何。

発句の「夜寒」は、その前書が「夜更けぬ程に出で、」<sup>注4</sup>「折から夜寒の一句を得たり」と語る如く、須磨十月二十一日、晩秋の嘯目当季題なるが、前句のそれは必ずしも然にあらざり。「其夜宿に歸りてよりひたと腰骨痛みてつぐの日もひねもす得動か」ざりし体調下での、季題「夜寒」の選択であり、異なる条件のもとでの選択である。

当然、満尾から掲載までの二ヶ月余の月日の間、あるいは掲載する折に推敲加筆訂正が試みられたであろうことを推測する（前書は掲載に際し書き下されたと考えるのが自然）が、それが根拠に、自句に対する子規自身の添削、訂正、削除といった厳しき斧正の跡夥しき点を挙げれば充分首肯しえる。にも拘らず、たとえ折が初ノ表、四ノ表と各々異なり、しかも、発句と第八十八句目の平句と大きく隔たれど、同一季題重複に気付かぬ可能性は極めて小さい。気付けば彼の気質から推して当該付句の季題を然るべき当季題に替え整えたと考えるのは易い。

が、子規はそれをせず、承知の上で「夜寒」と治定、十二月二十九日付「日本」紙上に掲載。なれば、前句の「夜寒」は時候当季題ながら同時に腰痛に苦しむ子規の心象風景を内包すると見立てるのが自然。それは寒寒とした孤独の思いであったらうし、否、絶望に近いものであったやも知れぬ。

離松間際の体調不良重なりし日日、<sup>注6</sup>それを押しての帰京、生死が行き交った須磨の地で再発病の危惧と恐れ、心情の振幅は死の予測さえも含むものであったに違いない。そうした予測が脳裏を過ったであろう徴証が恐ら

く「新墓」の「新」である。

打越が描く凄絶にして荒寥な風景に応ずるに、

### 夜寒の櫛匂ふ古墓

風の、平凡で軽い叙景句でも不都合はなかった。勿論、「古墓」に替えて「古塚・化野・鳥辺野」等々でも然したる違いなし。しかし、敢えて「新」に拘ったと解したい。

按ずるに、彼が見た「新墓」の被葬者は子規自身に他ならなかった。大患蘇生の須磨での再発、死の予覚。一旦は満二十九を一期とし泉下の人たりしと傍人に思わせたが幸い危篤状態を脱し、回復養生するものの、恰も死神に魅入られし如く「腰骨」の「痛み」に襲われ、実感せる死への思いを「新墓」に探る時、付句の「年七十」の意味が判ってこよう。

齡「七十」、周知ながら「古來稀」<sup>注8</sup>と詠まれる長寿の賀の祝いのひとつ。『論語』<sup>注9</sup>にも「七十而從心所欲 不踰矩」と説かれ、言うなれば自在長寿の年。

一方、子規は『笈の小文』<sup>注10</sup>擬きでいえば「吾俳句を好むこと久し、終に生涯のはかりごとくならず。ある時は倦で放擲せん事をおもひ、ある時はすむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゞかふて、是が爲に身安からず。しばらく身を立む事をねがへども、こが爲にさへられ、暫く學で愚を曉事をおもへども是が爲に破られ、つるに無能無藝にして只此一筋に繋る」生き方、孔子の言説に倣えば而立目前の二十九。志学の頃将来政治家たらんと夢抱くが、詰るところ文学に志し、又ある時は小説家として世に立たん<sup>注11</sup>と欲すれど又々断念。爾来、「明治時代に俳諧の最期を見」<sup>注12</sup>んとし、「發句ハ明治に盡くべきもの」と予言、その予言を現実せんと只管俳句に

狂し、俳句に淫する三昧境。遠大なる志も未だ道半ば、加えて、明治の御代は西歐列強に比肩すべく着着と近代国家へその礎を固めつつあり、正しく而立の時代、明治大帝は齡四十半ばの壮年期。斯る時代趨勢の中、死と真向かわねばならぬ子規に思い巡らせば、到底古稀まで命永らえざりし己が命数、当夜脳裏を過つた幻の己が「新墓」。傍なる新しき墓碑に「記」されし享「年七十」。もし我七十まで存命なりせば、遠大なる志も十二分までにとはゆかぬがそこそこ意に添う形で開花結実、「俳諧の最期を見」届けながら「從心所欲 不踰矩」る生を送りえたであろうこと思えば、腰の痛み一人耐えつつ独吟百韻運座に気を紛らす須磨の「夜寒」は一入。

斯くあらまほしけれの「年七十」ならんか。

一見素ツ気なく、逃句ともいえないような付句であるが見方ひとつで外面白い付け筋が浮ぶものである。但し、解釈の可否、当否となれば論外なること又然り。

なれど子規の痛苦の思い、同情禁じえぬもの覚ゆ。

注1 灯ともさぬ村家つゞきの夜寒かな

を独吟百韻の発句とす。「日本」紙掲載時に見る運座の経緯を記せる前書にも「夜寒」の語あるが右発句のことゆえ今は措く。

2 『連理秘抄』(二條良基著)は、

發句は寂大事の物也、おぼろげにては得がたし(略)發句の悪きは一座穢れてわるく見ゆ。左右なくすべからず(略)又發句に時節の景物背きたるは返々口惜しき事也、殊に覺悟すべし、景物の宗とあるがよきなり、

と説く(既出、岩波文庫本37、38頁)。

3 荒木繁・山本吉左右編注『説経節』(平凡社刊、東洋文庫243、昭48・11・10)

収該書、新潮日本古典集成『説経集』(室木弥太郎校注、昭52・1・10)収、

参照

4 詳しくは、拙稿「子規連句私解獨吟百韻」灯ともさぬ」の巻 其一」

(「学苑」745号、同760号(其九)参照

5 斯る心象は当然過日の記憶と通底、想起せしむるものであろう。一例を示す。

(略)漸ク退院の許可を得て當地ニ來り申候 自分ハ死ぬると迄も思ハざりしが醫者さへ氣遣ひしと聞てハ今更夢のやうに覺えて半ハうれしく半は恐ろしくはては老耄人の如くつまらぬ事ニ心配致候やうに相成候

拙句 夏瘦の骨にとゞまる命哉

(略)其實ハ兩人(碧梧桐・虚子一引用者注)の思ひ居候よりは更ニ甚だしきもの御座候 碧虚杯看護致吳候後ハ一時間でも人が側に居らねば心細く覺え候事屢々有之從て兩人の顔を見る時は我子にでも逢ひし時の感なるべしと思ふ様の感起る事有之候(略)今の老耄ハ實ニ恥かしく存候 併シ病氣の少しツゝよくなると共に勇氣もやう／＼に候 此一點一生の遺憾ニ有之候 今日ノ如き無氣力にては此後たとひ何年生きたりとも何事も出來申間數候(略)

(明治27・7・27付内藤素行宛書簡(全集)第十八卷、566頁、傍点引用者)

6 詳しくは、『散策集』(松山市民双書1、増補版)、『全集』第十三卷所収、前集参照

7 「病床日誌」五月廿八日の条に(傍線引用者)、

(前略)

一 江間氏云フ患部昨日以來追々ヒロガル滋用物ヲ食セザル爲メ體力弱

リヲル萬一ノ事ナシトモ云ヒ難シ東京家族ヲ郵便ニテ呼ブベシ(略) 注意に従ひ即刻母子呼寄の電報を陸氏迄出す

(全集)第十四卷、358、359頁)

(略)咯血前後二十日間に渡り申候 自分はそれ程にもなかりしが傍人いたく心配して鳴雪翁杯は最早小生を以て地下の人とせられ候ひしとかあ

とにて聞及ひ候(略) (明28・7・6付五百木良三宛書簡(全集)第十八卷、557頁)

8 杜甫七律「曲江二首」後半部、

朝回日日典春衣 每日江頭盡醉歸

酒債尋常行處有 人生七十古來稀

穿花蛺蝶深深見 點水蜻蜓款款飛

傳語風光共流轉 暫時相賞莫相違

の領聯、四句目を典拠とする。

(漢詩大觀)中卷(鳳出版刊、昭49・6・5復刊)所収「杜少陵詩集」卷六、

1159頁)

9 『論語』爲政第二、

子曰、吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。

六十而耳順。七十而從心所欲、不踰距。

晩年の孔子が自らの來し方を回顧した言説として余りにも有名な章句。

(新釈漢文大系1『論語』(吉田賢抗著、明治書院刊、昭35・7・25、40頁)

10 芭蕉の本文は傍点部を「かれ狂句」とす

11 『全集』第十二卷収「新年二十九度」「十年前の夏」参照

12 明治二十五年三月十日付河東兼五郎宛書簡(全集)第十八卷、280頁)

(おおしま とみお 日本語日本文学)